

## 平成 14 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 朝倉 哲彦 先生

朝倉哲彦先生は 1955 年鹿児島医科大学を卒業され、国立東京第一病院にてインターン終了後、1956 年から同院外科研究員として勤務された後、鹿児島大学精神神経医学講座に 1960 年より助手として、1961 年からは助教授として奉職されました。先生のライフワークとなりました「てんかん研究」はこの鹿児島時代に始まりました。1965 年から 1967 年まで、カナダのブリティッシュコロンビア大学神経研究所へ留学され、聴原発作の実験的研究 (*Experimental Neurology* 19:346-349 1967) に従事されるとともに、新大陸の主要施設を訪問されて見聞を広められました。

1969 年には東京女子医科大学脳神経外科講師となられ、1971 年助教授に昇進、1975 年まで勤務されました。この間、先生はご自身「てんかんの外科治療」に取り組まれるとともに、その普及にも尽力されました。当時は大学紛争の最中であり、精神外科への批判が、實際上、側頭葉てんかんの外科治療さえ困難とした時代でした。そのような状況のなかで、先生は「再び、てんかんの外科治療を！」という旗印を掲げて、講演と執筆に努められました。1973 年に京都で開催された第 6 回脳神経外科特別問題懇談会「てんかん」は、てんかん外科再興への重要な一里塚であったと考えられますが、先生は、「側頭葉てんかんの外科治療—Foerster の生誕 100 年に寄せて—」という優れた講演をされました (第 6 回脳神経外科特別問題懇談会講演録 pp93-107 1973)。そのなかで発表された *Infero-medial temporal lobectomy* は、やがて *Selective amygdalohippocampectomy* として完成する側頭葉皮質を温存する低侵襲手術の萌芽であったと思われます。この時代の先生の活動は、1980 代に起こった我国のてんかん外科の発展にとって、重要な礎となりました。

先生は、1975 年、鹿児島大学脳神経外科講座主任教授に推挙され、第 2 の鹿児島時代が始まりました。1997 年のご退官までの 22 年間、先生は、「てんかん」を教室の主要研究テーマの一つとされ、神経生理学的研究、CT・MRI・MRS・SPECT などの画像診断的研究、外科治療、病理学的研究など多彩な研究を指導され、多大な成果を挙げられました。また、この間、第 15 回日本てんかん学会 (1981) をはじめ、ペンフィールド記念懇話会 (現日本てんかん外科学会)、日本脳神経外科学会、日本定位脳神経外科学会、日本脳波筋電図学会など、数多くの学会を主宰されました。先生は、これらの機会に「てんかんの外科治療」をシンポジウムや講演の主題として積極的に取り上げられ、てんかん外科が一般の脳神経外科医および外科以外の関連専門分野の医師に正しく理解されるよう、真摯な努力を重ねられました。

国際関係の活動としては、国際抗てんかん連盟 (ILAE) の外科委員会特別委員として、NIH Consensus Developing Conference に参加され、てんかん外科治療に関する国際的合

意の策定に参画されました（てんかん研究 8：184-187 1990、9：73-76 1991）。先生が1992年に霧島で開催された「国際てんかん外科治療シンポジウム」は、画期的な出来事でした。日本のてんかん外科の伝統と現況を世界に知らせるよい機会でもあり、また、てんかん外科に取り組んでいる若い世代に対する力強い激励の機会となりました。

先生は長くてんかん治療研究振興財団の理事を努められ、1997年には、八木和一、渡辺一功両氏と共に、長期研究助成による共同研究により「てんかん外科治療の基本指針」を完成されました。これは、てんかん外科治療に関する基本的なガイドラインとして、長く評価されると思われます。また、日本てんかん協会からは、長年にわたるてんかん医療に関する啓蒙運動に対して、木村太郎賞(1991)が授与されております。

以上、朝倉哲彦先生の、我国のてんかん学とてんかん医療に対するご貢献は真に顕著であり、とくに、てんかん外科を発展させて、てんかん包括治療体系のなかに正しい形で定着されたご功績は特筆すべきであると思われます。

東京警察病院 副院長  
真柳佳昭